

11月6日 創世記18章1～15節 今日の説教から

説教題：「神様、そんなことはありません」

今日の聖書箇所に記載されている物語には、多くの「ありえない」ことが記されています。私たちの理解では旅人をそこまで全力をもってもてなすなどはあまり考えられませんし、家長であるアブラハムがわざわざ奉仕をすることにも違和感を抱いてしまいます。そして何より、老齡であるアブラハムとサラの間に子どもが生まれるなんてことは、「ありえない」事でありました。

ただ、私たちの神様は、多くの「ありえないこと」を現実にする神さまであります。旧約聖書に記載されている天地創造から始まり、多くの奇跡は私たちの常識を超えて実現してきました。そして新約聖書に記載されているように、神様は死の定めにある人間に永遠の命を与え、復活という奇跡を起こし、審きの後に永遠の住処を私たちに与えてくれる方です。そのように、私たちの想像もつかないような形で私たちへの愛を示してくれるのが私たちの神様なのです。

そして、イエス様の誕生、そこにもおおくの「ありえない」出来事が集まっています。さすがに寒さの厳しい冬のユダヤ地方では赤子が屋外で夜を過ごせば死んでしまいますので、季節自体は違ったのですが、生まれたばかりの赤子が馬小屋の飼葉おけに寝かされるといことは「ありえない」光景です。私たちの目には牧歌的にうつりますが極めて過酷な環境です。神様の子どもであり、キリストとなる方がそのようなみすぼらしい環境で生まれるという「ありえない」状況、生命の象徴である赤子が、死を義務付けられて、それも「罪がないのに処刑される」運命を背負わされて生まれるという「ありえない」背景、王となるべきメシアが、一般家庭で、大工という普通の職業の家に生まれたという「ありえない」状況、そのすべてが当時のユダヤ人たちがイエス様をキリストであると信じることを難しくしていました。

旧約聖書において預言されていたメシアが、これほどまでに小さな生まれ方をするだなんて、当時の誰が予想したのでしょうか。まさにそんなことは「ありえない」、そう思われたからこそ、イエス様は多くのユダヤ人にメシアであると、キリストであると理解されないまま十字架に向かって歩むことになりました。もし私たちが心を頑なににして、目の前に起きている出来事から「ありえない」と背を向けてしまったとすれば、その時私たちも頑なにユダヤ人たちと同じく、イエス様の事すら信じる事が出来なくなってしまうのではないのでしょうか。

「ありえない」という思いによって心を頑なににして、そこから一歩も踏み出すことが出来なくなるのではなく、「もしそうであったら」と想像力を働かせて、「いまそうである」という現状と闘いながら、私たちは信仰を深めていくことができます。どこに神様の御心があるのかを問い続けながら、それでも私たちは信仰によって導かれて、イエス様を主であると告白し続けるのです。私たちの祈りは聞き届けられます。私たちの声は、神様に届いています。だからこそ、このような時代においても私たちは絶望ではなく希望の歩みを続けていくのです。

どれほど不可能なことも神さまであれば実現することが出来る、その希望に支えられながら、今週一週間の、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：創世記 18 章 1～15 節

- 1:主はマムレの櫪の木の所でアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」その人たちは言った。「では、お言葉どおりにしましょう。」アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

- 9:彼らはアブラハムに尋ねた。「あなたの妻のサラはどこにいますか。」「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、彼らの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。アブラハムもサラも多くの日を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていた。サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。主はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあるのか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」